

椋の道草 第29回 「多摩川」

熊谷かりん

子どものころ、大きな川の近くに住みたいと思っていた。都会の中でも、川には広い空があるからだ。多摩川の近くに引っ越してきたとき、そのことを思い出した。仕事場兼住居の場所を決めた時点では、川も近くにあれば散歩もできていいな、くらいにしか考えていなかったが、賃貸契約を終えたあと、夕方の土手に登ってみて息をのんだ。

それは10月で、夕空に富士山の影がくっきりと見えていた。その富士山から私のいる土手の上まで、暮れの空がつなぎめのない一枚の布のように続いていた。その下に川があった。

以来十数年、仕事にあきると多摩川に行く。冬は風が強く、夏は日を遮るものがないので、運動不足解消に歩くだけだが、春と秋は土手や川べりでのんびりするのが気持ちいい。



いちばん好きなのは初夏だ。ぎしぎしの花の黄緑色や、チガヤの穂の白を見ながら土手を越え、野原を横切る。野原の少し離れたところには、何年か前の洪水で運ばれてきた倒木がそのままになっている。踏み分け道を通って、コンクリートで固めた川岸に出て、護岸の斜面に足を伸ばすようにして座る。気に入っているのは、私の背丈ほどあるノイバラの茂みの前だ。

腰を落ち着けると、鳥たちの姿が目に入ってくる。河原の石と同じ色をしたアオサギ。突然目の前の水面に浮上すると、驚いてまた潜るカワウ。背後の野原からは、空気を裂くようなセッカの声がする。川と用水路が合流するあたりをみると、上空にアジサシがホバリングしている。ときどき、誰かが支えていた手を離れたみたいにするうっと自由落下する。アジサシがこのあたりにいるのは、初夏の時期だけだ。なんども水に潜るアジサシの姿を目に焼き付ける。

私の俳句は多摩川生まれが多い。日常生活の俳句を作ろうとすると、家の中だけでなく、多摩川で過ごしている時間まで含まれている気がする。忙しさにかまけて足が遠のいてしまう時期もあるけれど、少しずつ進む季節をできるだけ見逃さないようにしたい。